

連歌(連ね歌)

連歌は、日本の連歌の定型化した共同的な形式であり、複数の歌人が関係します。その形式は 14 世紀から 19 世紀の間に栄えました。それは特に宮廷社会と教養のあるエリートの間で人気がありました。

伝統的に、最初の詩人は 5-7-5 の音節パターンを持つ 3 行の連を作ります。これは次の詩人によって答えられ、彼は 7 音節の 2 行からなる連を詠みます。この順序が繰り返され、各作者は前の節だけを基にして構成し、作品の展開に合わせて絶え間ない発想を行います。とくに機知と学識の才が重んじられました。よくあるテーマには、自然、季節、愛、その他の感情などが含まれます。

太宰府天満宮では、菅原道真の神格である天神を祀るために連歌が用いられました。神社の歴史学者によると、詩人に連歌の最初の句を「告げる」天神を詩人たちが夢に見ており、その物語があるといえます。即興の連歌の創作は、単に機知と知性を示すだけでなく、宗教的な行為とも考えられ、作品は後世に記録として書き残されました。

1598 年に「連歌の夢」という意味で書かれた夢想連歌の巻物の一例をここで見ることができます。梅の木で装飾された本文は、1382 年に行われた 1,000 句の連歌の集まりのものです。